実践報告

ドラマ制作活動から初級日本語学習者は何を得たか

―高専進学を目指す中学生を対象にした「サマープログラム 2022」のデザイン―

キーワード
ドラマ制作活動，初級日本語学習者，タイの中学生，高等専門学校，モチベーションの獲得

久保田育美

1. はじめに

国立高等専門学校機構（以下，高専機構）は平成 30 年度より，タイ政府奨学金留学生受入れ事業という新たな留学生受入れ事業を開始した。全国の国立高等専門学校（以下，高専）が従来受け入れてきた留学生というのは，海外の政府から奨学金を受けて派遣されている政府派遣留学生（マレーシア政府派遣およびモンゴル政府派遣），国費留学生，私費留学生であり，いずれの留学生も後期中等教育またはそれに相当する課程を修了した後，予備教育機関で日本語や基礎理数系科目等を学んで高専の本科第 3 学年に編入する（国立高等専門学校機構，2022）。

それに対し，タイ政府奨学金留学生受入れ事業では，タイの理数系中学校を卒業した生徒を第 1 学年から受け入れる。当該事業は，中学校卒業直後(1)の生徒を第 1 学年から正規の学生(2)として受け入れる点，そして，当該留学生の入学時の日本語能力が初級レベル相当であるにもかかわらず，他の学生と同様の環境で理数系科目や専門科目を学ばなければならないという点が，従来の高専における留学生の受け入れと比べて特徴が大きく異なる。このような，10 代半ばという若さであり，且つ，日本語の習熟度が低い状態の留学生の受け入れは，高専はもとより他の高等教育機関にもほとんど例を見ない。そのため，高専機構ならびに送り側であるタイ教育省は，当該留学生の円滑な受け入れを促進するための各種イベントをこれまで実施しており，タイ政府奨学金留学生受入れ事業を担当する受入れ高専(3)がそれらに協力・参画している。筆者が所属する明石工業高等専門学校（以下，明石高専）もまた，受入れ高専の 1 校である。

本報告は，明石高専が高専への進学を目指すタイの中学 3 年生に対して実施した「サマープログラム 2022」の実践について報告するものである。3 節で後述するが，筆者はドラマ制作活動を取り入れて本プログラムをデザインした。本稿では，「サマープログラム 2022」の実践を行うに至った背景を説明したうえで，プログラムの概要を示し，プログラム当日の生徒の様子について詳述する。最後に，参加者のアンケート結果ならびに筆者による観察か

ら実践をふりかえり，ドラマ制作を中心とした本実践が生徒にもたらした効果についてまとめる。

2. 実践の背景

2-1 タイ政府奨学金留学生受入れ事業の現状と課題

タイ政府奨学金留学生受入れ事業は，タイにおける産業人材育成の施策の一環である。高専にタイの中学校卒業生を予備教育期間なしで受け入れることで，タイ出身の学生を日本人学生と同じ年数で修了させ，タイの高度技術者育成というニーズへの迅速な対応を狙う。具体的には，理数系の中高一貫校であり，タイ国内に 12 校設置されているプリンセスチュラポーンサイエンスハイスクール（以下，PCSHS）の中学 3 年生が対象であり，平成 30 年度は 11 名（第 1 期生），平成 31 年度から令和 3 年度までは 12 名（第 2 期生～第 4 期生），令和 4 年度以降は 24 名（第 5 期生以降）が選ばれ，受入れ高専に進学している。

前述のとおり，選抜された生徒には予備教育期間がないため(4)，当該事業開始当初，生徒の多くは，高専への進学が決定した後に日本語学習を開始し，PCSHS における通常授業のかたわら，放課後の補習や自学自習というかたちで日本語を勉強していた（第 1 期生および第 2 期生）。その後，タイ教育省が民間日本語学校に委託し，進学が決定した生徒に対して日本語学習の機会を提供するようになった（第 3 期生以降）。また，国際交流基金による支援のもと，PCSHS 中等部の日本語カリキュラム統一に向け，2020 年から PCSHS において日本語が必修科目として位置づけられた。それにより，PCSHS 中等部の生徒全員が中学 1 年生から授業で日本語を学ぶ環境が整った(5)。

このように，高専への進学を目指す生徒に対する日本語教育の支援体制は徐々に整備され，集中的な予備教育が施されないながらも，生徒自身が日本語学習の重要性を少なからず認識できる状況が整いつつある。しかしながら，当該生徒は高専入学後，日本人学生とともに日本語で科目学習を行い，また，学生寮では日本や寮の習慣に倣って共同生活を送らなければならない。入学時点の彼らの日本語能力はこのような留学生活に耐えうるレベルとは程遠く，また，日本人との交流や日本の生活を知らない，もしくは慣れていない生徒にとって，上記のような留学生活は負荷が極めて大きい。

さらに，高専生活がどのようなものであるか，生徒に実感が湧かないといった点もまた課題の一つである。さまざまな情報がインターネット上に溢れている今日において，生徒が高専や高専生を知ることは容易なことである。しかし，果たして生徒はそれらの情報を「自分事」として捉えられるものであろうか。言語，文化，生活環境が異なる中に身を置いた自分を具体的にイメージすることは，社会経験自体が少ない 10 代半ばの生徒には困難なことではないだろうか。実際に留学後，期待や現実とのギャップやカルチャーショックを感じ，不安やストレスを抱く学生が少なくないのが現状であるが，これは，留学前に情報を得ることができても，それらが実感に結び付きにくいという状況に起因していると推察される。

2-2　サマープログラムとは

受入れ高専は，タイ政府奨学金留学生受入れ事業が開始した平成 30 年度から毎年サマープログラムを実施している。サマープログラムは，タイ政府奨学金留学生を決定する最終選抜試験と同時期に実施されており，受入れ高専の 1 校が毎年順番に主管校となって，企画，運営，実施を行っている。サマープログラムでは，受入れ高専が高専進学を目指すタイの生徒に対して授業や高専生活の体験，高専生との交流を提供する。事業 1，2 年目の平成 30，31 年度は，タイの生徒がサマープログラム開催校に集まり，高専の授業や実験・実習，日本人学生との交流を体験した。令和 2，3 年度は，新型コロナウィルス感染拡大の影響でタイの生徒の来日が叶わず，オンラインでの講義や高専生との交流等が実施された。

3.「サマープログラム 2022」のデザイン

3-1　「サマープログラム 2022」の目的

令和 4 年度の「サマープログラム 2022」は，明石高専が主管校となり，タイ政府奨学金留学生第 6 期生の最終選抜試験を受験する生徒（以下，参加生徒）に対して実施することとなった。

ここで，「サマープログラム 2022」の企画にあたり，2-1 で述べた，当該事業が抱える課題をあらためて述べておきたい。それは，高専入学時点の学生の日本語能力が留学生活に必要な日本語レベルとかけ離れていること，そして，留学後の自分を具体的にイメージし，高専への留学を「自分事」として捉えることが困難であるということである。これを踏まえ，「サマープログラム 2022」の目的を以下の 2 点とした。

(A) 参加生徒の日本語学習ならびに高専進学に対するモチベーションの向上
(B)「高専」を共通項とした生徒・学生同士の交流の促進

3-2　「サマープログラム 2022」の目標

前述の目的のもと，本プログラム参加生徒の目標を以下のとおり設定した。

(1) 1 年後高専生活をおくる自分自身を思い描くことができる
(2) 仲間と日本語を使ってコミュニケーションをとることができる
(3) 仲間と関わり，助け合い，同じ目標に向かって一つのものをつくり上げることができる

目標 (1) では，参加生徒が高専や高専生を知るだけでなく，それら知ったことを自分の姿としてイメージし，自分なりに解釈できるようになることを目標とする。また，それらを自分自身で表現できるようになるという点にも重きを置く。

目標 (2) では，参加生徒が活動を通して仲間と日本語を使ってコミュニケーションがとれるようになることを目標とする。新型コロナウィルスの拡大とともに中学 1 年生となっ

た生徒達は，対面で日本人と接する機会がない中，日本語学習に取り組んでいた。日本人学生とやりとりする機会をつくり出すことで，生徒の日本語使用も多くなり，またその経験が学生の日本語学習に対する励みに繋がると考えられる。さらに，日本人学生と日本語で話したいという気持ちが，参加生徒同士の日本語使用を促進するとも考えられる。

目標（1），(2）でみたように，「サマープログラム 2022」は，参加者が知識を獲得したかどうか，あらかじめ想定されていた成果物を完成させたかどうかを評価の基準とはしない。刑部（2014，p.32）は協同的学習観を示し，「学習の目標」とは「知ることの再構築発見，学習のプロセスを味わうこと」，「学習」とは「知や学びを問い直すこと or 捉えなおすこと・新しい自分と出会うこと・魅力的な他者と出会うこと」とまとめている。「サマープログラム 2022」においてもこの協同的学習観の考え方を参考にし，参加生徒が目標（1），(2）を達成するプロセスのなかで新しい自分や他者と出会い，他者との関わりや活動を通して得たことそれ自体を学びと捉える。そこでは，ある程度困難が伴う，参加者が一人では成し得ないタスクをプログラムに取り入れることが参加者の学びを促進すると考えられる。そこで，目標（3）を参加生徒の 3 つ目の目標として設定した。

3-3　プログラムのデザイン

3-3-1　実施形態

「サマープログラム 2022」は，対面での実施の可能性を見据えて企画が始まった。本プログラムの企画案を考え始めた 2022 年 3 月の時点で，タイ教育省が，参加生徒を来日させるのは当時の状況から困難であると判断していたため，前年度までと同様，オンラインでの実施が想定されていた。しかし，本プログラムの目的を達成するためには，参加生徒に高専生との対面交流の場をつくることが重要だと考え，明石高専のサマープログラム運営・実施メンバーがタイへ渡航し，タイ現地で実施することを前提に企画を進めることとした。

3-3-2　サポート学生の選出

サマープログラムの企画・運営の主担当は，明石高専の日本語教育担当である筆者が担当したが，担当教員とともに企画の段階からプログラムに携わり，当日現地で活動に参加し，参加生徒をサポートする「サポート学生」を明石高専生から選出することとした。サポート学生は，明石高専の本科生から募集し，応募書類，面接，そして，普段の課外活動や留学生サポートに関わる活動への参加状況を参考にし，6 名[6]選出した。サポート学生 6 名の参加には，参加生徒との交流を期待するだけでなく，学生ならではのアイデアを企画に反映できること，また，サポート学生自身の経験と成長を促進する点においても意義があると考えた。本稿はサポート学生の活動について詳述しないが，本プログラム準備期間，当該学生には，目的・目標に沿った活動（アイスブレイクならびに高専・高専生を「知る」ための活動）の考案と準備に携わってもらった（4-2 および 5-1 において言及する）。

3-3-3　目標達成のためのメイン活動

「サマープログラム 2022」の目標を達成するためのメイン活動はドラマ制作にすることとした。その理由は次の 3 点である。

1 点目は，ドラマ制作において，参加者がある役柄を演じることで，その役柄の立場になって考えたり感じたりすることができるからである。渡部（2014，p.17）はこのことを「『全身で学ぶ』ことを通して，深く豊かな『学びの経験』を獲得していくプロセスである」と述べている。本プログラムの場合，自分なりに高専生活を想像して高専生活をおくる未来の自分ないしは誰かの立場になりきり，それらを自由に表現することで，体験的に，高専生活を自分事として捉えられるようになると考えられる。

2 点目は，日本語初級レベルである参加生徒にとって効果的な言語活動(7)になると考えられるからである。参加生徒は役柄を演じる際，自分が使おうと思った日本語を使い，ドラマの練習を重ねてその日本語の表現力を鍛えることができる。他方，既習日本語のみで演じることが難しい場合は，日本語だけでなく，自分自身の動きや表情，音，小道具等といった非言語のものに頼ることもできる。

3 点目は，ドラマ制作には仲間とのコミュニケーションが不可欠だからである。ドラマの制作過程には，アイデア出しからシナリオ作成，ドラマを演じる練習まで，多くの段階が含まれる。活動に多くの段階が含まれるということは，ドラマ制作が容易なタスクではなく，参加者一人ひとりが役割を持った，協働的な活動になることが見込まれる。

さらにここで，中等教育段階の生徒を対象に行われたドラマ制作の先行実践である黒田（2020）および中尾ほか（2022）を取りあげておきたい。前者は，タスクを達成してにほんご人(8)としての満足感と自信を得ること，振り返りを通じてにほんご人としての自覚や将来の希望を深めることを目的としている。他方後者は，生徒の感情の揺さぶりを伴う深い気づきが起こるプログラムを試みている。双方とも教師研修の視点で実践が記述されているが，生徒が自分自身と向き合い，また，他者との協働を通して発想や成果を生み出すことに重きを置いている。これらの実践は，中等教育段階の生徒にとって，ドラマ制作が互いの情報や考えを共有し，全身を動かしながら自分達の発想を表現する場として有効であることを裏付けていると言える。ドラマ制作が日本語使用の機会となると同時に，開放的で想像的な環境であるからこそ，日本語の習熟度が低くても，生徒がアイデアを無限に膨らませ，仲間とともに表現の工夫に挑むことができる場になると考えられる。

なお今回は，参加者が演じたものを動画機能で撮影・編集してドラマを完成させてもらうこととした。その理由は，演じたものに手を加えることができれば，発想力・創造力の幅が広がると考えたからである。

3-4　目標達成度についての考察

「サマープログラム 2022」における参加生徒の目標達成度は，生徒へのアンケート，サポート学生へのアンケート，筆者による観察，以上 3 つの結果から考察を行う。

4.「サマープログラム 2022」の概要

4-1　日程ならびに参加者

「サマープログラム 2022」は 2022 年 8 月 24 日～25 日の 2 日間，プリンセスチュラポーンサイエンスハイスクールチョンブリー校（以下，PCSHS チョンブリー校）で実施した。参加生徒は，タイ政府奨学金留学生第 6 期生の最終選抜試験を受験する生徒 45 名である。明石高専からは，サポート学生 6 名，そして，タイ政府奨学金留学生第 2 期生でもあるタイの先輩学生 2 名が当日サポート要員として参加した。また，筆者のほか，明石高専の教員 1 名が同行し，タイ教育省ならびに PCSHS チョンブリー校教員がオブザーバーとして部分的に参加した。

4-2　活動スケジュール

「サマープログラム 2022」は，3 節で示した目的・目標のもと，図 1 に示すイメージで活動の内容を考えていくこととした。図 1 の活動のイメージは，苅宿（2012，p.41）が挙げているワークショップの 3 つの場面「位置づく」「見立てる」「味わう」を参考に，「サマープログラム 2022」で参加生徒に起こるであろうことを筆者がタイトル化して示したものである。フェーズⅠは，参加者が，初めて出会った他者や活動の様子を探りながら緊張を解き，自分と他者との関係性を意識し始める場である。次にフェーズⅡは，本プログラムの中核の活動の場であり，参加者が他者や活動の対象について知り，また協働的な作業を通してチームで課題に取り組んでいく場である。続くフェーズⅢは，フェーズⅡまでの段階で参加者がつくり上げたものを参加者全員で共有し，さらに共通の価値観で共感し合える関係性を参加者間で構築する場である。

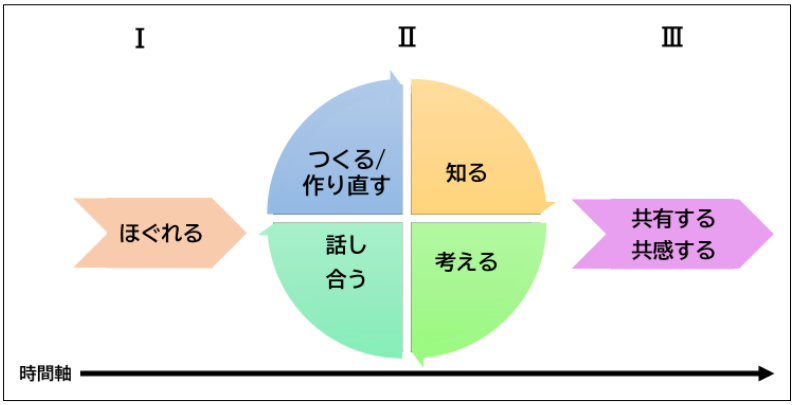

図 1　「サマープログラム 2022」の活動のフェーズ

図 1 のフェーズのもと，プログラム 2 日間のスケジュールを次頁の表 1 のとおり決定した。「サマープログラム 2022」の参加生徒は PCSHS 各校から集まっており，出身校が同じ者同士を除けば初対面となる。そこで，1 日目午前中は，参加者が互いを知り，緊張をほぐすためのアイスブレイクを約 2 時間かけて実施する。これが活動のフェーズⅠに相当する。

なお，2 日間にわたり，参加者を 6 チームに分け，各チームに参加生徒が 7～8 名，サポート学生が 1 名ずつ入るようにする(9)。

アイスブレイクの後はドラマ制作を中心としたメイン活動に移る。本活動がフェーズⅡに該当するものであり，「知る・考える・話し合う・つくる/作り直す」が循環する活動として，2 日目前半まで行う。

2 日目午後はフェーズⅢに移行し，各チームが制作したドラマの鑑賞を全員で楽しむとともに，制作活動に対する労いと達成感を互いに共有する時間とする。

なお，表 1 で「(※サ)」と書かれた活動は，サポート学生が中心となって考案した活動であることを示している。活動準備初期の段階から筆者とサポート学生とで図 1 の共通認識を持ち，そのうえでサポート学生には活動準備にあたってもらった。

表 1　「サマープログラム 2022」の活動スケジュール

<table>
<tr><th>時間</th><th>活動内容</th><th colspan="2">活動のフェーズ</th></tr>
<tr><td colspan="4">【1 日目】8 月 24 日（水）</td></tr>
<tr><td>8:30</td><td>オープニング</td><td colspan="2" rowspan="3">Ⅰ，Ⅱ</td></tr>
<tr><td>8:45</td><td>アイスブレイク 1（※サ）</td></tr>
<tr><td>9:45</td><td>アイスブレイク 2（※サ）</td></tr>
<tr><td>11:00</td><td>メイン活動（ドラマ制作）の導入</td><td rowspan="6">メイン活動</td><td rowspan="6">Ⅱ</td></tr>
<tr><td>12:00</td><td>昼食休憩</td></tr>
<tr><td>13:30</td><td>明石高専オンラインツアー（※サ）</td></tr>
<tr><td>14:30</td><td>ドラマ制作</td></tr>
<tr><td>15:30</td><td>タイの先輩学生からのこぼれ話</td></tr>
<tr><td>16:00</td><td>ドラマ制作</td></tr>
<tr><td>16:30</td><td>1 日目のまとめと翌日のスケジュール確認</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="4">【2 日目】8 月 25 日（木）</td></tr>
<tr><td>8:30</td><td>アイスブレイク 3（※サ）</td><td colspan="2">Ⅰ</td></tr>
<tr><td>8:50</td><td>2 日目のスケジュール確認</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>9:00</td><td>6 高専とのオンライン交流会（※サ）</td><td rowspan="4">メイン活動</td><td rowspan="4">Ⅱ</td></tr>
<tr><td>10:15</td><td>ドラマ制作</td></tr>
<tr><td>12:00</td><td>昼食休憩</td></tr>
<tr><td>13:00</td><td>ドラマ制作</td></tr>
<tr><td>14:00</td><td>ドラマの上映会</td><td colspan="2" rowspan="3">Ⅲ</td></tr>
<tr><td>15:30</td><td>アンケート回答</td></tr>
<tr><td>16:00</td><td>エンディング</td></tr>
<tr><td>16:30</td><td>終了</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

4-3　ドラマのテーマ

ドラマ制作の活動は，目標 (1)「1 年後高専生活をおくる自分自身を思い描くことができる」を参加生徒が達成するうえで重要な役割を担う。そこで，ドラマ制作におけるテーマを次のとおり 2 つ設け，どちらのテーマもドラマに取り入れることを制作条件とした。

テーマ１：１年後高専生活をおくる私たち
テーマ２：「○○○○○」（各チームで日本語の言葉を一語決め，テーマとする）

テーマ１は目標（1）に沿うかたちで設定した。他方，テーマ２の設定理由は，日本語の言葉を一語決定する過程が，参加生徒が日本語の言葉の意味や使用場面について考える良い機会になると考えたからである。また上記に加え，ドラマの長さを 5 分間とする条件を付けた。

5. 活動の様子

本節では，「サマープログラム 2022」の活動を，図１で示した活動のフェーズに沿って順に追い，参加生徒に起こったことを中心に活動の様子を記述していく。

5-1　活動Ⅰ（ほぐれる・知る）：オープニング，アイスブレイク

【オープニング（名札をつくろう）】

オープニングでサポート学生にニックネームを呼ばれた参加生徒はチームごとに集まり，用意された用紙とペンを使って名札作成にとりかかった。ここではあえて言語の指定はしていなかったが，参加生徒の多くが自分のニックネームをカタカナで書こうとし，各チームのサポート学生に尋ねながら名札を作成する様子が見られた。また，ニックネームの意味を絵で表現する生徒もいた。言葉で伝えることが難しいニックネームの意味をサポート学生に伝えるために絵を添えたものと思われる。

写真１　参加生徒を呼ぶサポート学生

【アイスブレイク１（整列ゲーム，自己紹介ゲーム）】

アイスブレイク１は整列ゲームから始まった。これは，与えられたお題（誕生日順，身長順）に合わせ，できるだけ早く並ぶゲームである。互いに話さず，非言語で相手に情報を伝える必要があるが，言葉を使わないことが功を奏し，参加者は緊張感を持たずに「ほぐれる」「互いを知る」ことができた様子であった。続いて行った自己紹介ゲームも「互いを知る」ためのゲームである。お題が「好きな食べ物」の場合，１人目は「すし」，２人目は「すし」「とんかつ」，３ 人目は「すし」「とんかつ」「トムヤムクン」といったように，自分の前の人の回答を順番通りに言ったうえで自分の回答を言うゲームである。

【アイスブレイク２（英語&日本語しりとりゲーム，単語あてゲーム）】

アイスブレイク 2 では言語使用の要素が強くなる。しりとりゲームは，1 回目を英語，2，3 回目を日本語で行った。1 回目を英語にした理由は，初回から日本語では参加生徒の負荷が大きいとサポート学生が推察したためである。写真 2 にもあるとおり，各チームの前にボードを置き，一人ひとりが言葉を繋いでいく様子とその記録をチーム全員で見られるようにした。そのおかげで，日本語の単語が思い浮かばない生徒に対して他の生徒がヒントを与えたり，表記のミスを指摘したりする様子が見られた。しりとりゲームはチーム対抗戦としたこともあり，チーム総出でしりとりをし，大きな盛り上がりを見せた。

他方，単語あてゲームは，お題係，お題の単語をあてる質問者，質問者からの質問に答える回答者の 3 者にわかれ，質問者が単語をあてるまで質疑応答を繰り返すゲームである。写真 3 は，質問者が回答者に対して「高専にありますか？」「勉強するときに使いますか？」と質問し，最終的にお題の「食堂」をあてている場面である。

なお，2 日目朝のアイスブレイク 3 では，参加者全員でラジオ体操を行った。毎朝ラジオ体操を行うという明石高専学生寮の習慣が発案のきっかけである。

写真 2　しりとりをする参加生徒

写真 3　単語あてゲームをする参加生徒

本項で説明したアイスブレイクにおいては，オープニングとは対照的に，サポート学生は進行を主導するのではなくチームの一員として参加した。これは，活動準備を経てサポート学生自らが判断したことであり，アイスブレイクに生徒と同じ目線で参加することで，生徒が自分達と接しやすくなるだろうと考えたためである。そのため，アイスブレイクの進行はタイの先輩学生と筆者が行った。

5-2　活動Ⅱ（知る）：明石高専オンラインツアー，6 高専とのオンライン交流会

本項で紹介する 2 つの活動は，サポート学生からでは伝えきれない高専・高専生の特長や魅力を参加生徒に知ってもらうことを目的としている。ドラマ制作の過程にこれらの活動を挟むことで，生徒達の凝り固まったアイデアをほぐす，あるいは，ある程度出来上がったドラマの内容をより良いものに再構築するきっかけが与えられると考えた。

【明石高専オンラインツアー】

当該活動では，会場と明石高専をオンラインで繋ぎ，明石高専から参加協力してくれた学

生が，課外活動（ロボット工学研究部，エコランプロジェクト(10)）や学生寮を紹介する様子をライブ配信した。サポート学生とタイの先輩学生は進行役となり，遠隔で参加した明石高専生と生徒とのやりとりを繋いだ。

オンラインツアーの様子は会場の前方にある大型スクリーンに映した。明石高専生からの紹介という一方通行的な情報伝達にとどまらないよう，ツアーの途中でサポート学生が参加生徒に呼びかけ，質問を促した。参加生徒の中にはロボットや車に関心を持つ生徒が多いため，ロボットそれ自体に関する質問や，課外活動の頻度・時間帯に関する質問が出た。なお，本活動は「知る」が目的であるため，参加生徒の理解がより促進されるよう，進行・質疑応答ともに，英語またはタイ語で進められた。

【6 高専とのオンライン交流会】

タイ政府奨学金留学生第 6 期生として選抜された生徒は，各受入れ高専に進学することとなる。高専・地域によって特色が異なるため，他の高専との交流を通して「知る」こともまた意義のある活動となる。そこで，活動準備期間に明石高専から他の受入れ高専に協力依頼をし，承諾を得た 6 高専（八戸高専，仙台高専，茨城高専，富山高専，津山高専，高知高専）に活動に参加協力してもらうこととした。具体的な内容は，高専・地域の魅力を伝えるポスター1 枚を各高専で事前に作成してもらい，交流会本番ではそのポスターの情報をもとに，参加生徒と交流してもらうというものである。

交流会本番は，各高専の教員，タイの先輩学生，日本人学生が遠隔で参加し，高専ごとにブレイクアウトルームに分かれてもらった。参加生徒も各自のデバイスで参加した。サポート学生が進行役を兼ね，参加生徒がブレイクアウトルームにバランスよく配置されるよう調整を行った。交流会は 1 回あたり約 20 分間とし，ブレイクアウトルームの参加生徒を入れ替えて計 2 回実施した。

写真 4　オンライン交流会の様子

なお，1 日目午後に「知る」活動として設定した「タイの先輩学生からのこぼれ話」は，先輩 2 名に参加生徒からの質問に応じながら対談形式で話をしてもらう予定としていたが，当日は時間の都合上省略することとなった。しかし，活動としては実施できなかったものの，参加生徒は，休憩中やドラマ制作中に会場を回っている先輩学生をつかまえてやりとりを交わし，さまざまな情報を得ていたようである。留学生という立場で高専生活をおくる先輩の経験談は，参加生徒にとって貴重で，身になる情報となったようである。

5-3　活動Ⅱ（知る・考える・話し合う・つくる/作り直す）：ドラマ制作

本項では，プログラムの中核となるドラマ制作の活動において，生徒がどのようにドラマ制作に参加していたか，ドラマ制作の過程で生徒に何が起こっていたかについて，活動のフ

ェーズⅡの各段階に照らし合わせ，記述する。

なお，本活動中，サポート学生はファシリテーターとして各チームに入った。実は活動準備期間，サポート学生には「夏休みタイにいる私たち」「マイペンライ（和訳：大丈夫）」という 2 つのテーマで 1 分間のビデオドラマをチームで制作する体験をさせていた。初めて顔を合わせた仲間とアイデアを出しながらドラマを制作する体験は，本プログラムで参加生徒が乗り越えていくタスクと同じである。筆者からサポート学生に「チームの中に入ってこんなサポートをしてほしい」と口頭で伝えるよりも，サポート学生が体験から気づいたドラマ制作の面白さ，大変さ，驚きこそが，サポート学生自身で「サポート」を決めていくきっかけになると考えた。なお，タイの先輩学生には会場全体を見回ってもらったが，必要以上にチームのサポートに入らないよう事前に伝えておいた。筆者は会場全体を回って参加生徒の様子を観察した。

5-3-1　全チームに見られた出来事

まず，全チームに見られた出来事については以下のとおりである。

- ドラマ制作の最初の段階は，メンバー全員が一つの円になり，メイン活動を始める体制を整えた＜考える，話し合う＞
- まず，テーマ 2 の日本語の決定に向けてアイデア出しを始めていた＜考える＞
- 5-2 で述べた活動を通して，参加生徒は高専や高専生について知識を獲得した＜知る＞
- ドラマ制作の過程で，サポート学生も演者の一人となった＜つくる/作り直す＞
- サポート学生は，参加生徒の中に介入しすぎず，生徒を見守る姿勢をとっていた
- ドラマ撮影後，生徒数名が動画編集作業を行っていた＜考える，話し合う，作り直す＞

写真 5　アイデア出しの様子

写真 6　シナリオ作成の様子

5-3-2　特定のチームに見られた出来事

続いて，特定のチームに見られた出来事について詳述する。各チームで決定したテーマ 2 の日本語は「おいしい・え？・おつかれ・やばい・ごめん・ともだち」となった。

【チーム「おいしい」】

- テーマ 2 を決めた後，「おいしい」を表す食べ物や学食のメニューについて情報を得る

ため，参加生徒がサポート学生に尋ねたりネットで調べたりして新たな情報を獲得していた。また，参加生徒がサポート学生にタイ料理について説明する様子も見られた＜知る，話し合う＞

- メンバーの数人が会場内を歩きながら，会場内のもののうちどれを小道具にすることができるかを考えていた＜考える，話し合う＞
- 会場内にある椅子，ペットボトル，紙，タブレット等，あらゆるものを小道具に変え，食堂の場面をつくり上げていた＜考える，話し合う，つくる/作り直す＞

【チーム「え？」】

- テーマ2の決定から始まったものの，やりとりの多くは英語での雑談が占めていた。メンバーの多くがサポート学生との英語での会話を楽しんでいた＜知る＞
- 早々に日本語のあいづちに着目し，そこからテーマ2の候補を絞っていた。ここでも依然として（チーム外から見る限りでは，一見ドラマ制作に関係ないような）絵を描いたり，アイスブレイクで使用した紙をいじったりしながら，やりとりが進んでいた＜話し合う＞
- シナリオがある程度決まった後＜考える，話し合う＞，会場の外に出て撮影場所を探し演じていた＜つくる/作り直す＞

【チーム「おつかれ」】

- 複数の生徒がリーダーシップをとり，テーマ2のアイデア出しを進行した＜考える，話し合う＞
- サポート学生による「おつかれ」の補足説明ののち＜知る＞，シナリオを決め＜考える，話し合う＞，会場の外に出て撮影場所を探し演じていた＜つくる＞
- 休憩中，参加生徒とサポート学生が会場に隣接している広場でバスケットボールをしていたが，途中からその光景をドラマに取り入れようということになり，休憩中の遊びが結果的にドラマの一部となった。その後，休憩していた他のチームの生徒やタイの先輩学生もバスケットボールに加わり，演者としてチーム「ごめん」のドラマの一員となっていた＜つくる/作り直す＞

【チーム「やばい」】

- 日本語が得意な生徒がアイデア出しを主導し，タイ語やタイ文化にはない，日本語や日本文化ならではと考える言葉「やれやれ」「やばい」「ルール」を取り上げ，それぞれがいつ使われるのか，なぜ日本ならではの言葉だと思うのかについて他のメンバーに説明していた＜知る＞
- 他の生徒がアイデア出しを主導する生徒に対して質問を投げかけ，その生徒が質問に答えたりサポート学生が情報を付け加えたりし＜知る，話し合う＞，そのなかでテーマが

決定した＜考える，話し合う＞

【チーム「ごめん」】

- テーマ２の決定後，どのような場面で「ごめん」を使うかをチームで話し合っていた＜考える，話し合う＞
- 場面を決定した後，配役を決め，各自でセリフを考えて英語で紙に書きだしながらストーリーを作っていった＜考える，つくる/作り直す＞
- 会場の外に出てシナリオに沿って撮影を始めた＜考える，つくる/作り直す＞

【チーム「ともだち」】

- まず，ストーリー決めの音頭を取った生徒が紙とペンを持ち，漫画のコマを並べるようにストーリーを書き始めた。ストーリーが完成した後，続いて他の生徒が紙とペンを持ち，その生徒が中心となってセリフを書き始めた＜つくる＞
- ストーリー作成，セリフ作成，それぞれで中心となっている生徒を囲むようにして，他のメンバーがその様子を眺めていた。時々メンバー数人がアイデアや意見を出している様子が見られた＜考える＞
- アイデアや意見出し，それらについてのやりとりはタイ語で行われた。一部の生徒がサポート学生に日本語や英語で翻訳し，進捗状況を説明していた。
- 完成したシナリオに沿って練習を始めた。特定の学生が淡々と作業を進めていた前半とは異なり，ここでは，撮影場所を探したり実際に演じたりしながら，メンバーが活発に意見交換を行っていた。前半は聞き手に徹していたサポート学生も意見交換に参加していた＜話し合う，作り直す＞

写真７　練習の様子

写真８　撮影の様子

写真９　動画編集の様子

5-4　活動Ⅲ（共有する・共感する）：ドラマの上映会，エンディング

【ドラマの上映会】

２日目午後はドラマの上映会を行った。各チームが制作したドラマを会場の前方にある大型スクリーンに映し，参加者全員がドラマを鑑賞した。全員が静かにドラマに見入ることも

あれば，会場中が笑いに包まれることもあり，各チームのドラマから感じられる楽しさ，面白さ，辛さ等を参加者全員がその場で共有した。

5-3-2 で前述した内容と一部重なるが，ここで，各チームのドラマの内容を簡単に紹介しておく。チーム「おいしい」は，日本人学生とタイ人学生が学内で食事をとるまでのやりとりを演じた。ドラマの中で使っていた日本語は「おいしい」のみであったが，会場内のさまざまなものを小道具に変え，動画の編集機能を含めた非言語ツールを活かし，食べ物が「おいしい」ことやそのように感じる様子を表現した。他方，「え？」「おつかれ」「やばい」「ごめん」の各チームは，その言葉が学校で使用される場面・状況を複数とりあげ，それぞれの言葉をキーワードのようにドラマに散りばめ，学校や学校周辺を舞台にして演じていた。とくに「ごめん」のチームは，謝罪だけでなく，感謝，依頼・質問の前置き，試合で失敗したときの感嘆詞として，「ごめん」を使用する実にさまざまな場面を取り上げていた。以上 5 つのチームがテーマの日本語をドラマのキーワードのように使ったのに対し，チーム「ともだち」は，留学生が日本人学生からの理解を得ることの大変さ，留学生が孤独であることの辛さを伝えるシナリオでドラマを制作した。

【エンディング】

チームで活動をふりかえる時間および参加者全員で 2 日間をふりかえる時間を設け，「サマープログラム 2022」を締めくくった。前者では，参加生徒は個人のふりかえりも兼ねたアンケート回答の後，チーム内でドラマの感想を言い合ったり，互いの頑張りを労ったりしていた。また，サポート学生がチームの生徒に短い手紙を書いて渡している様子も見られた。後者では，全員で一つの円をつくり，肩を組みながら歌を歌った。さらにここでは，参加生徒一人ひとりからの一言メッセージがサプライズでサポート学生に贈られた。このメッセージは，タイ教育省のスタッフの計らいで，参加生徒が 2 日目昼休みに事前に書いていたものであり，エンディングの際，会場のスクリーンに映し出された。各自が抱いていた喜びや感謝の気持ちが共感を呼んで会場内に溢れ，写真を撮ったり抱擁したりするなど，しばらく余韻が冷めない状態が続いた。

写真 10　エンディングで歌を歌う参加者

6. 実践のふりかえり

6-1　参加生徒の目標の達成度

本項では，参加生徒が「サマープログラム 2022」の目標 (1)，(2)，(3) を達成できたかどうかを考察していく。考察は，参加生徒へのアンケート結果，サポート学生へのアンケート結果，筆者による観察の 3 つの観点から行う。

なお，参加生徒およびサポート学生へのアンケートは，ドラマの上映後に回答の時間を設けた。アンケートはMicrosoft Office 365のFormsで実施し，記述部分については参加生徒にはタイ語，サポート学生には日本語で回答を求めた。本稿で提示する回答結果は，結果の開示について同意を得た参加生徒42名およびサポート学生6名の結果であり，生徒の記述内容の日本語訳は筆者が行った。

6-1-1　目標(1)：1年後高専生活をおくる自分自身を思い描くことができたか

参加生徒およびサポート学生へのアンケート結果のうち，目標（1）に関する質問項目の回答結果を表2に示す。なお，質問項目は5件法であるが，表中では回答数が0であった選択肢を省略したうえで，回答の結果を提示している（以下，表3，表4も同様）。

表2　目標（1）に関する質問項目と回答の結果

アンケート対象者	質問項目	回答した選択肢（回答人数）
参加生徒	(a)「サマープログラム2022」全体を通して高専や高専生について知ることができたか	・よくイメージできた（27） ・イメージできた（15）
	(b) ドラマ制作を通して高専生活をおくる自分（または自分と友だち）をイメージできたか	・よくイメージできた（22） ・イメージできた（14） ・どちらとも言えない（6）
サポート学生	(c) あなたのチームの生徒は「サマープログラム2022」を通して高専や高専生について知り，興味を持ったと思うか	・みんなそうだと思う（5） ・多くの生徒はそうだが一部そうでない生徒もいた（1）

質問（a）の具体的な記述として，高専に関する情報（勉強，寮生活，課外活動，規則といった基本情報から，情報を通して感じた驚き）に関する記述が最も多く，20名から挙がった。他方，サポート学生のこと（〇〇さんは優しい，△△さんの性格はとても良い等），サポート学生と日本語で話した経験，先輩（サポート学生，タイの先輩学生）との間に生まれた友情に関する記述が17名に見られた。高専に関する情報だけでなく，サポート学生や先輩の存在，2日間を共に過ごした思い出が，生徒の印象に残ったものと思われる。サポート学生5名が「チームの生徒全員が高専や高専生について知り興味を持った」と回答していることからも，目標（1）は十分に達成されたと言える。

筆者が観察してとくに印象に残ったのは，参加者が学校生活に関する話題で盛り上がっている場面が活動内外を問わず多く見られたことである。所属している課外活動，最近学校で夢中になっていること，日タイの学校のルールの相違点などについて，会話を楽しんでいる様子であった。これらの会話は，生徒が高専や日本の生活に対する想像力を膨らませる要因の一つとなったであろう。また，5-4で述べたように，チームそれぞれがプログラムで知ったことを踏まえて自分達なりの高専生活をイメージし，ドラマを制作することができていた。チーム「ともだち」を例にとれば，「ともだちをつくる」ことに対して，誰もが期待の裏に抱いているであろう不安がドラマで顕在化したものと思われる。本プログラムで得た知識や経験，仲間とのやりとりを踏まえてドラマを練り直した（作り直した）からこそ，メッセージ性の強いドラマが完成したのではないだろうか。

他方，複数の動画を貼り付けてこまかな動きを表したり，撮影場所を高専の実習工場や明石市内にある明石海峡大橋に見立て，字幕やアイコンを用いて鑑賞者の理解を促したりと，動画の編集機能の助けを借りて発想を豊かに表現していた様子も窺えた（一方，動画の編集作業には課題も見られた。これについては 6-1-3 で言及する）。

以上 3 つの観点から，目標（1）は本プログラムにおいて達成されたと考えられる。

6-1-2　目標(2)：仲間と日本語を使ってコミュニケーションをとることができたか

目標（2）に関する質問項目の回答結果は表 3 に示している。質問（d）で目立った記述は「楽しい」「難しい」「勇気が持てた」であり，それぞれ 12 名，5 名，6 名の生徒に見られた。「楽しい」の内容は主に「日本語で話す練習ができたこと」「先輩と日本語で話せたこと」「相手に伝わるように日本語でコミュニケーションをとること」であった。「難しい」は，日本語を使ってコミュニケーションをとることが難しい反面，「チャレンジできた」「みんな一生懸命だった」「新しいことを学んだ」とポジティブな内容が「難しい」と共に書かれていた。そして，「日本語を話すこと」「外国人と話すこと」「人前で話すこと」に対して勇気が持てた，「日本語が上手なことよりも相手と話す勇気を持つことが大切だとわかった」のように，日本語で日本人とコミュニケーションをとる経験が自信に繋がったことを表す記述も複数見られた。

表 3　目標（2）に関する質問項目と回答の結果

アンケート対象者	質問項目	回答した選択肢（回答人数）
参加生徒	(d) 「サマープログラム 2022」全体を通して仲間と日本語を使ってコミュニケーションをとることができたか	・よくできた（26） ・できた（14） ・どちらとも言えない（4）
サポート学生	(e) あなたのチームの生徒は日本語を使ってあなた（または日本人学生）と積極的にコミュニケーションをとろうとしていたか	・みんなしていた（3） ・多くの生徒はしていたが一部そうでない生徒もいた（3）

一方，サポート学生へのアンケートでは，下記のような記述がみられた（下記は原文ママ）。

- 私のチームの生徒は、私がタイ語をほとんど話せないため、タイ語をほとんど使わずに、私と話すとき以外でも英語を使用して会話をしていました。英語を使って話すのが苦手な子の代わりに、私に英語で説明をしてくれた生徒や、日本語がとても得意な生徒など、本当に優秀な生徒達でした。
- 私の班では言語が大きな壁となってしまったように感じます。数名は日本語を話すことを恥ずかしがっており、一番話せる生徒にいつも助けを求めていました。英語でもお話ししたのですが、なかなか伝わらないと生徒側が申し訳なさそうにしてしまいました。
- 外国人とのコミュニケーションに躊躇のある生徒がいた。

サポート学生の記述は，ドラマ制作におけるチーム全員の意思疎通が，日本語よりもタイ語や英語が大部分を占めていたことを示している。アイデアや意見を出し合い決定すると

いう過程において，ツールが日本語だけではかなりの困難を伴ったということだろう。

筆者が観察した限りにおいても，ドラマ制作を進めることを目的に日本語でコミュニケーションをとることは難しい様子であった。これは，日本語の習熟度が低い生徒が参加者であることを考えれば当然の結果であり，想定の範囲内である。他方，日本語が得意な生徒で，既習語彙を駆使して一生懸命日本語で話そうとしていた生徒もいた。チーム「ごめん」のように，ドラマ制作が「ごめん」という日本語の意味と使用実態を吟味する機会となったチームもあった。相手と日本語でやりとりをするという目標達成に直接関わらないが，日本語を知る・使うという点では一定の成果があったと言えるだろう。

以上をまとめると，本プログラムの活動は，大半の生徒にとって日本語で完璧な意思疎通をするには困難であったものの，日本語を話したり使ったりする良い機会になったことがわかる。ときには，使用言語が英語や非言語にシフトし，6-1-1 でも述べたように学校の話題で会話を弾ませている生徒も多く見られたが，これは，チーム内でのコミュニケーションを円滑且つ活発にしようと，生徒が意思疎通を図ったためであると考えられる。日本語が難しければ英語や非言語に頼ってコミュニケーションを続けることは母語が異なる者同士のコミュニケーションにおいては大事なことであり，何人かの生徒はその大切さに気付くことができていたのではないだろうか。またそれだけでなく，「困難である」ということが，生徒の日本語使用に対するチャレンジ精神や自信にも繋がった。本プログラムが生徒に日本人と日本語でコミュニケーションをとる機会を提供し，さらに日本語使用に対するモチベーションを高めるうえで有効だったと評価できる。

6-1-3　目標(3)：仲間と関わり，助け合い，同じ目標に向かって一つのものをつくり上げることができたか

表 4　目標（3）に関する質問項目と回答の結果

アンケート対象者	質問項目	回答した選択肢（回答人数）
参加生徒	(f) ドラマ制作を通してあなた自身の力でできたことはあるか	・たくさんある（20） ・ある（20） ・どちらとも言えない（1） ・全然ない（1）
	(g) ドラマ制作を通してあなたは他の人を助けることができたか	・たくさんある（20） ・ある（20） ・どちらとも言えない（2）
	(h) ドラマ制作を通して他の人があなたを助けてくれたことはあるか	・たくさんある（30） ・ある（11） ・あまりない（1）
サポート学生	(i) あなたのチームの生徒は仲間と助け合い活動に参加していたか	・みんなしていた（4） ・多くの生徒はしていたが一部そうでない生徒もいた（2）

質問（f)～(h）について，ほとんどの生徒が「たくさんある」「ある」を回答しているが，中には「自分の力でできたことは全然ない」「他の人が自分を助けてくれたことはあまりない」と回答している生徒もいた。当該生徒の記述を見てみると，質問（f）で「全然ない」と

回答した生徒は「他のみんなが協力してアイデアを出し合っていたから」，質問（h）で「あまりない」と回答した生徒は「ドラマ制作で自分はあまり問題がなかったから」と記述している。しかし，前者の生徒は質問（g）(h)，後者の生徒は質問（f）(g）それぞれで，自分ができた／他者からしてもらった行動を具体的に記述しており，当該生徒が自分と他者との関わりがあったことを自覚していないわけではないことがわかる。また，質問（h）で「たくさんある」の回答人数が 30 人であったことにも注目したい。とくに，質問（f）(g）で「たくさんある」以外を回答し，質問（h）で「たくさんある」と回答した人数は，30 人中 10 人にのぼっている。この結果は，自分が他者にしたこと以上に，他者が自分にしてくれたことが多かったと感じている生徒が相対的に多いことを示している。

他方，サポート学生からは，チーム内の生徒の行動について以下に挙げる記述が見られた（下記は原文ママ。ただし，生徒の名前はアルファベットに変更）。

- 活動中は女子が指示を出し、男子は黙っているような様子も見られました。
- 全員、動画編集のスキルが中学生とは思えないほど見事に備わっていた。
- T 君が率先してグループをまとめていました。ドラマのおおまかなストーリーも彼が主に担当していました。U 君は主人公役で日本語のセリフが多く、覚えるのに苦戦していましたが何度も頑張って練習していました。V 君はドラマの内容を決める際にはよく意見を言っていました。W 君は動画編集をしてくれていました。よく日本語で話しかけてきてくれたりしました。X さんはよく話しかけてきてくれていて、ドラマの台本の説明などもよくしてもらっていたので助かりました。Y さんは基本グループを見守っている感じでしたが、片付けなどを率先していました。Z 君はドラマのセリフを担当していて、日本語のセリフなども質問しながらも頑張って作っていました。

筆者が観察中，手持無沙汰にスマートフォンを使い出す生徒が何人か見受けられた。これらの生徒は，しばらくの間活動に関係ないと思われる行動を続けており，筆者自身，観察中は多少懸念を抱いていた。しかし，サポート学生の中には，生徒一人ひとりの行動をよく観察していた学生がおり，当該学生は「～の際によく意見を言っていた」「基本グループを見守っていたが，～は率先していた」とアンケートに記述している（上記の下線部。下線は筆者による）。筆者はその記述を読み，一見活動に参加していないように見える生徒も，ある部分において，あるいはチームの外からでは観察しきれないところで，しっかりと自分の役割を持ちチームに貢献していたことを理解した。参加生徒の参加の仕方の良し悪しを安易に評価するべきではないこと，実践者が参加者のさまざまな参加様態を認める視点を持つこと，そして，丁寧で細やかな観察が必要であることについて考えさせられる結果となった。

上述のように，生徒一人ひとりを観察し，それらを言語化してくれたサポート学生もいたが，5-3-1 でも述べたように，基本的に参加生徒を見守る姿勢をとっていたのは，サポート学生 6 名に共通していた点である。おそらくこれは，サポート学生が事前にドラマ制作を体験し，自分達で考えドラマをつくり上げる醍醐味を少なからず体感したからではないかと思われる。また同時に，サポート学生はサポート要員といえども，参加生徒と同等の目線

でメンバーの一員として活動に参加しようという共通の意識を持っていた。先に述べた，アイスブレイクへの参加についても然りである。そのため，ドラマ制作において，最終的にサポート学生も演者の一人となり共にドラマをつくり上げることとなったのであろう。参加生徒とサポート学生との間に生まれた「水平的関係」が垣間見えた出来事であった。

他方，ビデオ編集の際，一部の生徒しか作業に取り組んでいなかったことにも言及しておきたい。これは，ビデオ編集が，タブレットやスマートフォンといった小さい画面を前にして行う作業であり，物理的に大勢で取り組むことが難しいためだと考えられる。これは実際に活動を観察する中で気づかされた点である。

以上のことから，目標（3）はおおむね達成されたと言えるが，厳密に目標達成度を考察するには，より丁寧な観察が必要であった。また，ビデオの編集作業を協同的な活動として十分にデザインできなかったことも企画側としては反省しなければならない。

6-2　「サマープログラム 2022」全体のふりかえり

最後に「サマープログラム 2022」全体をふりかえり，本プログラムの目的が達成されたかどうかを考察する。

目的（A）「参加生徒の日本語学習ならびに高専進学に対するモチベーションの向上」は，参加生徒の目標（1），（2）の達成度から見ても，十分に達成されたと言える。本プログラムは日本語能力それ自体の向上を目的としているわけではなく，また，継続的なプログラムというわけでもない。したがって，本プログラムは，高専進学後の学生の日本語能力が高専生活に耐えうるレベルに至っていないという，タイ政府奨学金留学生受入れ事業が抱える課題の解決に直接的には貢献しない。しかしながら，参加生徒がプログラムを通して獲得した，日本語を上達させたいという向上心や悔しさ，難しくてもできたという自信，そして仲間とともに自分なりの高専生活を具体化できた経験そのものこそが，その後の日本語学習における糧となり，モチベーションに繋がると考えられる。また，参加生徒がそれらを得た背景には，サポート学生やタイの先輩学生の存在がある。高専生である彼らとのやりとりや交流を経て知り得たことが高専進学への意欲を喚起したと言える。このように，日本人との交流や体験活動の経験値が高くない中学生を，日本語を使わざるを得ず，日本人含め他者と協働しなければならない環境に放り込むことで，彼らに大きな原動力を与えることができたと考えられる。そして，その環境をつくり出した主な要因がドラマ制作の活動であったと捉えることができると思われる。

目的（B）「『高専』を共通項とした生徒・学生同士の交流の促進」は，目的（A）が達成される中で同時に達成されたと言ってよい。とくに，高専に進学する生徒にとって，日本語の言葉をテーマとしてドラマを制作するという，チャレンジングなタスクに共に取り組んだ仲間の存在は，高専進学後の心の支えになるのではないだろうか。もちろん，結果的に高専への進学が叶わなかった生徒にとっても，本プログラムを通して得た仲間とその繋がりは，人と人との繋がりとして簡単に消え失せるものではないだろう。

しかしながら，本プログラムの目的が真に果たされたかを判断するには，参加生徒のその後の日本語学習の様子や参加者同士の繋がりの変容過程までを観察する必要があるかもしれない。これについては，今後同様の目的を掲げたプログラムを実践する際の課題とし，参加者の変化と実践がもたらした影響との関係を分析できるようなプログラムのデザインを検討していきたい。

7. おわりに

本稿では，高専への進学を目指すタイの中学生を対象にした「サマープログラム 2022」の実践について報告した。「参加生徒の日本語学習ならびに高専進学に対するモチベーションの向上」および「『高専』を共通項とした仲間との交流の促進」の 2 つを目的として，ドラマ制作を中核としたプログラムをデザインした。また，高専生であるサポート学生およびタイの先輩学生も参加し，「高専」を共通項とした生徒・学生が実践の場に一堂に会した。参加生徒は本プログラムを通して仲間との交流を深め，さらに，仲間とともに挑んだドラマ制作活動では，高専や高専生に対するイメージを自分のなかで膨らませ，具体化し，日本語を使ってそれらを自由に表現した。そして，参加生徒の多くがその経験から日本語学習や日本語を使うことに対するモチベーションを獲得したと言えるだろう。

高専進学が決定してから実際に留学するまでわずか半年。中学校の勉強を進めるかたわら日本語学習に向き合う必要がある生徒に対して，上述の成果を伴った活動を提供できたことには意義があるだろう。当該生徒の日本語学習や科目学習に対する事前指導・支援が必要であることは言うまでもない。しかしながら，それと同時に，生徒のモチベーションを向上させ，高専への進学という，過酷ながらも挑戦的な舞台に立ち向かえる素地を生徒の中につくるサポートをすることもまた，重要であると考えられる。

【謝辞】

本実践は企画から実施に至るまで，多くの方々にお力添えいただきました。明石高専グローバルエデュケーションセンター，PCSHS チョンブリー校，タイ教育省，他の受入れ高専，高専機構本部国際企画課，以上の各機関および部署における関係各位，そして，本プログラムをともにつくり上げ実施してくれた，サポート学生はじめ関係学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

【注】

(1) タイの学校は 2 月下旬から 3 月初旬が終業時期であることが一般的である。したがって，当該生徒が中学校卒業後から高専に進学するまでの期間は約 1 か月である。

(2) 高専は高等教育機関であるため，本稿で言及する高専生を「学生」に統一して表記する。

(3) 受入れ高専は 2023 年 1 月時点で 10 高専（八戸高専，仙台高専，茨城高専，長岡高専，富山高専，津山高専，阿南高専，高知高専，沖縄高専，明石高専）である。

(4) 第 1 期生 11 名のうち，8 名は例外的に，日本学生支援機構において 1 年間予備教育を受け，高専の本科第 2 学年に編入した。

(5) 2020 年度，タイ教育省から，PCSHS から高専に留学する生徒に対する日本語教育についてのガイドラインが示された。当ガイドラインは PCSHS 中等部 3 年生前期終了までの目標到達レベルが JF スタンダード A1 後半，『みんなの日本語』第 1～12 課修了となっている。

(6) 選ばれたサポート学生は，本科 5 年生 2 名，4 年生 1 名，3 年生 2 名である。

(7) 高橋（2002）は中級後半の日本語クラスでビデオドラマ制作を行い，日本語学習者が日本人学生との共同作業を通して非言語コミュニケーションとともに日本語の発話能力を高めたことを報告している。高橋（2002）で対象となっている学習者は日本語中級後半であるが，非言語と言語を組み合わせて言語活動を行うことは，発話できる日本語に差があるものの，日本語初級レベルの参加生徒にとっても実行可能であると思われる。

(8) 黒田（2020，p.87）によれば，「にほんご人」とは，「国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち，そのために日本語でコミュニケーションをする人々」を指す。

(9) 活動が円滑に進むよう，チーム分けは筆者が事前に行った。しかし，筆者がタイ教育省から事前に得た参加生徒の情報は氏名と出身校のみであったため，メンバーを割り振る際は，出身校ができるだけ重ならないよう考慮するのみにとどまった。

(10) エコランプロジェクトとは低燃費競技車両を開発するプロジェクト活動のことである。

【引用文献】

(1) 苅宿俊文（2012）「ワークショップをつくる」苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎編『ワークショップと学び 3　まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会，31-91.

(2) 刑部育子（2014）「なぜ今、協同的に学ぶことが重視されるのですか？－ワークショップと協同性」茂木一司編集代表『協同と表現のワークショップ－学びのための環境のデザイン－（第 2 版）』東信堂，30-33.

(3) 黒田朋斎（2020）「参加者が体験から学ぶノンネイティブ日本語教師研修の試み－にほんご人フォーラム 2019 教師プログラムの実践報告－」『イマ×ココ』8，ココ出版，76-86.

(4) 国立高等専門学校機構（2022）「外国人留学生の受入れ」＜https://www.kosen-k.go.jp/about/global/international_exchange/foreign_student.html＞（2023 年 1 月 30 日最終閲覧）

(5) 高橋純子（2002）「中級後半日本語会話クラスにおけるビデオドラマ制作活動の報告－その効果と応用への可能性－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』17, 115-125.

(6) 中尾有岐・中尾菜穂・黒田朋斎・新谷知佳（2022）「『体験的な学び』を教師が体験的に学ぶ研修のデザインーオンラインにほんご人フォーラム 2020 の実践ー」『国際交流基金日本語教育紀要』18，83-94.

(7) 渡部淳（2014）「獲得型教育とドラマ技法研究」渡部淳＋獲得型教育研究会編『教育におけるドラマ技法の探求ー「学びの体系化」にむけてー』明石書店，9-34.

（明石工業高等専門学校）